日本教育新聞

【2011年11月28日付】

PTAなう NOW

〈6〉 横浜市立白幡小など

「社会総がかり」の催し

人脈生かし「風」入れる

茨城・真壁小では、児童がさまざまな職業に触れる

社会総がかりで教育を―。首相の下で教育改革を議論した教育再生会議がこのように呼び掛けて4年がたとうとしている。政権が変わった今も、この理念を実現に移そうとするPTAがある。

創立から75周年を迎えた横浜市立白幡小学校。10月末に行った記念式典はPTAの主催だ。テレビ局のアナウンサーを進行役に据え、関係の補佐官などを務めた経験を持つ大学教授や、オリンピックで何度もメダルを獲得した選手と共に、児童を交えて今後の教育を考えるシンポジウムとし、来賓あいさつなどは省いた。

土曜日の午後、体育館には5、6年生が集合。大学教授が「勉強以外で構わないから自分が好きなことをやってほしい」と助言すると、五輪選手は「好きなものを見つけたら磨き続けてほしい」とそれぞれ自分の経験を交えて、児童に語り掛けた。

本年度からPTA会長を務める藤川優さんは、民間企業に勤務。仕事を通して得た人脈を生かして、学校に社会の風を送り込むことに情熱を傾けてきた。

「学校だけでは難しいことを私たちの力で実現させたい。これからも、社会総掛かりで子どもを育てていかなければ」と話す。広告界で活躍したコピーライターを授業に呼んだこともある。

パネリストの発言の後には、何人もの児童が手を挙げてパネリストに質問。「勉強とスポーツを両立させるにはどうしたらよいか」「試合の前に緊張はどうしたらほぐれるか」など、普段の学校生活では聞けない質問が相次いだ。

全国で活躍する人の力を借りる学校がある一方で、地域社会に密着して生活する人の力を借りる学校がある。茨城県桜川市立真壁小学校は今月4日、地場産業である石材加工の職人や、和菓子職人などを招き、その職業の面白さや苦労などを語ってもらう催しを開いた。

本年で3回目。「職業フォーラム」と名付け、毎年秋の恒例行事となりつつある。発案した人は当時の校長だった。しかし、20人以上の講師を招いて、児童の前で語ってもらうという試みはとても教職員だけの力ではできない。PTAに相談し、学校との共催という方法で実現にこぎ着けた。

本年4月に赴任した梅井隆男校長。「児童にさまざまな職業について理解を深めさせるとともに、学校と保護者の関係、学校と地域社会の関係を深めるためのの取り組みでもあるのです」と話す。

4月の総会でPTA役員が決まると、本部役員と、各学年の代表役員、各専門部の代表役員などで構成する運営委員会ができる。6月から、職業フォーラムの準備を始める。

各家庭に、講師の推薦を依頼。これに先立ち、5、6年生の児童が職業フォーラムの実行委員会をつくり、児童から将来どんな職業に就きたいかアンケート調査を行う。講師の推薦に当たってはその調査の結果を添え、できるだけ児童が関心を持ってくれそうな講師を推薦してもらってきた。

その結果、石材加工、和菓子といった地場産業の他、フライトアテンダントや近くにある県立高校の教諭、看護師、保育士、獣医師なども講師として学校の門をくぐった。オートバイのレーサーも、愛車とともにやってきた。

本年度、22種の職種がそろった。児童は30分間の授業を4本受講する仕組みで、低学年の児童は学級ごとに、高学年の児童は班ごとに、教室を変えていく。受講する児童の人数に極端なばらつきが出ないように、あらかじめ、誰がどの講座を受けるか決めてある。

児童は「パティシエになることが夢でした。保育士の話を聴いて、本当になりたいものが見つかったような気がします」などの感想を記した。

真壁小は生活科や「総合的な学習」でも、多くの住民が協力してきた。梅井校長は、「そうした連携の積み重ねがベースになって職業フォーラムが実現しているのかもしれません」と話している。

本校のPTA主催による、創立75周年記念教育シンポジウム「白幡EDタックル」などに代表される保護者・地域と学校の連携の様子が、日本教育新聞に紹介されました。